



フューチャーリビングラボ プロジェクトルーム

株式会社 日立製作所 研究開発グループ  
東京社会イノベーション協創センター ビジョンデザインプロジェクト  
主任デザイナー

## 柴田吉隆

# ビジョンという仮説の中から 次の社会のヒントを探す

【ダイジェスト版】

Society 5.0という言葉をご存じだろうか。  
これは、2016年に日本政府が発表した次の社会を考える概念であり、  
1.0:狩猟社会、2.0:農耕社会、3.0:工業社会、4.0:情報社会に次ぐ大きな転換期を意味している。  
日立では、このSociety 5.0をただの概念と捉えるのではなく、  
また技術だけに答えを求めるのではなく、  
あるべき社会を考えるための議論から始めるという新しい試み  
「ビジョンデザイン」が動き出している。  
そのキーマンに話を伺った。

### 「ビジョンデザイン」では、 Society 5.0の具体像を描く

——はじめに、「ビジョンデザイン」ができた  
背景について教えてください。

柴田 2009年に日立は、事業を社会イノベーションにシフトするという宣言をしました。そのときに、デザインはどんな貢献ができるのかということを考えて、まずは社会イノベーション事業では、世の中のどのような変化を捉え、どのようなサービスが実施されているのか、その具体像を示そう、それをベースに、顧客協創で新しい事業を考えていけるようにしようというねらいで、「ビジョンデザイン」を立ち上げました。それが2010年です。

そして2016年に、大きな転機を迎えました。それは内閣府が、これからの日本社会のコンセプト「Society 5.0」を発表したからです。ただ、実際にSociety 5.0に関する資料が出てきたときに、やはり技術が中心に見えてしまっている部分があって、IoTやAI、自動運転などがすぐフィーチャーされている感じがしました。もちろん手段としてそういうものを使っていくというところは当然だと思いますが、Societyが4.0から5.0に変わるといことは、パラダイムが変わっていくということなので、それが何なのかをしっかりとみんなで議論していく必要があると思いました。

そこで、これまでの「ビジョンデザイン」の活動を、「Society 5.0」の具体像を描いて議論

を促すという方向にシフトすることを決め、2016年4月に活動を開始し、2017年には「ビジョンデザインプロジェクト」という専任チームをつくりました。

——「ビジョンデザイン」のコンセプトは何ですか。

柴田 政府の資料では、Society 5.0は超スマート社会となっていて、英語だとsuper smart societyと書いてあるのですが、スマートが価値なのではなく、何かの価値を実現するための手段としてスマートはあるべきです。そこで、私たちは「ビジョンデザイン」のコンセプトとしてスマートを超える価値を探る『beyond smart』という言葉を作りました。この言葉が私たちのものさしになっていて、自分たちが作っているビジョンに関しても、本当にそれが『beyond smart』の言葉に合っているかどうかをとても意識しています。

### 社会のビジョンは社会で形成されるべき

——Society 5.0は、これまでの工業社会(3.0)や情報社会(4.0)と何が違うのでしょうか。

柴田 Society 5.0に関する政府の資料を見ると、まず最初に人口減少の問題が出てきます。人口が減ることが必ずしも悪いことだとは思いませんが、これまでそういう状況を迎えたことがないわけですし、私たちはそれに対応していく必要があります。しかし問題はより複雑化してきて、自立した生活を送りやすくなる一方で、

地域や家族のつながりが弱まって、さまざまなリスクが個人に直接降りかかってしまうということも懸念されています。このリスクに対する不安や、地域や家族のつながりに着目して、社会全体を強くしていくことがSociety 5.0のインフラの新たな役割になるのではないかと考えています。

ビジョンは、「ここに向かっていくぞ」という正解を示して、「オー」とみんなに向かっていくのではなく、やっぱり社会の中で形成されていくべきではない。デザインのアプローチというのは、まず駄目でもいいから課題設定に関するアイデアを出してみ、それでみんなを触発しながらディスカッションが始まって、解決のためのアイデアが取捨選択されながらブラッシュアップされていくというプロセスです。「ビジョンデザイン」も同じで、社会に対して、新しい役割を担ったSociety 5.0のインフラの具体例を示して、そこからさらにディスカッションを積み重ねていくことが重要です。

Society 3.0や4.0は、初めからソリューションを提案したり、企業協創でつくることができていたのに対し、5.0の世界では、多くの方々の対話をより大切にして、ビジョンもソリューションも社会の中で形成していくことが特徴です。

### 次の社会を描くために、 社会課題をしっかりと捉える

——Society 5.0の具体化のために、実際にどん



アーティファクト  
Personalised meal bar  
(Centralised & Curated)  
提供されたユーザー情報をもとに、必要な栄養素のみならず、食べるタイミングまで個人向けにカスタマイズされている。



アーティファクト  
Locally printed medicine  
(Distributed & Autonomous)  
コミュニティ内で製造された薬は、その変わった形状から、自分の地域のものであることが地域の人には一目で分かる。



アーティファクト  
Connected ID card (Decentralised & Transparent)  
型にはまらない単発仕事をするギグワーカーのIDカードは、そのとき行っている仕事に合わせて実績やスキルの表示が切り替わり、相手に伝わる。

[柴田吉隆 (しばた・よしとか)]  
株式会社 日立製作所 研究開発グループ  
東京社会イノベーション協創センター  
ビジョンデザインプロジェクト  
主任デザイナー

1999年日立製作所入社。ATMなどのプロダクトデザインを担当ののち、デジタルサイネージや交通系ICカードを用いたサービスの開発を担当。2009年からは、顧客協創スタイルによる業務改革に従事。その後、サービスデザイン領域を立ち上げ、現在は、デザイン的アプローチで形成したビジョンによって社会イノベーションのあり方を考察する、ビジョンデザインプロジェクトのリーダーを務める。

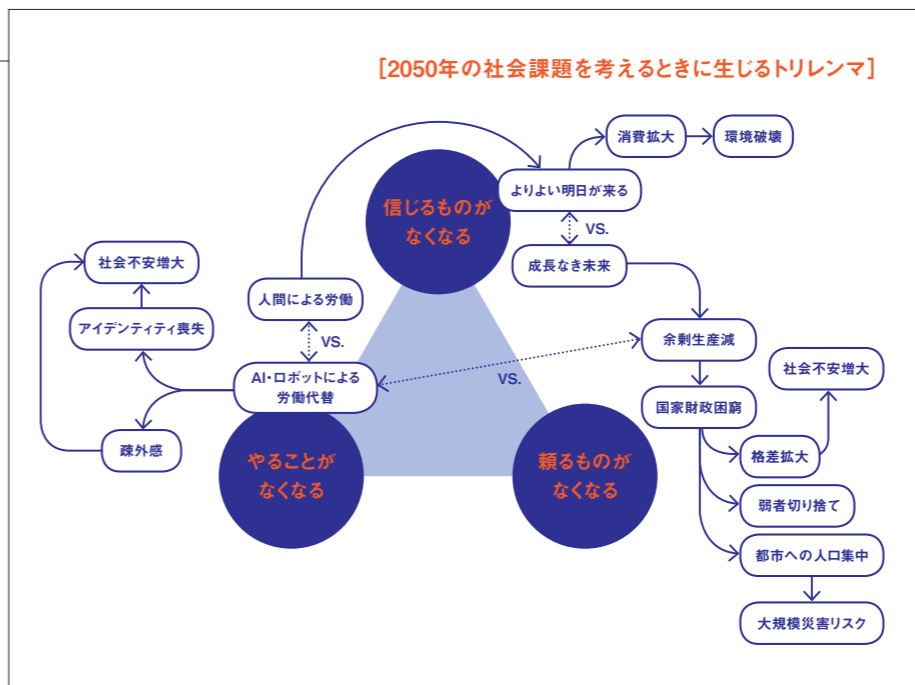


が備えるべき役割のヒントを得ようと思っています。私たちは「未来考古学」と呼び、これらの特徴的な信頼が形成されている社会で、人々が日常的に使っている「モノ」を想像して、アーティファクトと呼んでいる日用品のプロトタイプをつくることで、そこからさらに社会への発想を広げ

のプロジェクトを起しました。私たちは信頼の形を、「Centralised & Curated」、「Distributed & Autonomous」、「Decentralised & Transparent」と異なる3つの世界に設定し、これらがどのように成り立っているのかを考えることで、将来の社会システム

らと思っています。

そして、これからの信頼の形を考えることが将来社会に向けたデザインの役割なのではないか、という私たちの考えに賛同してくれたデザイナーコンサルティング会社である「Method」のロンドンスタジオと一緒に『FUTURE TRUST』



なアクションを起こしたのでしよう。  
柴田 まず、次の社会を描くためには、Society 5.0の社会課題とは何かをしっかりと捉える必要があると考えました。2010年から、「25のきざし」(\*)など、人の考え方や行動の変化の契機を洞察する活動を始めましたが、それを発展させた活動として京都大学の先生と「2050年の社会課題」というテーマでディスカッションを始めました。霊長類、税制論、

古代ローマ史、人の心のありよう、東南アジアやアフリカ社会など、さまざまな分野の先生と、これまでの社会課題やこれからの社会課題、それが生まれるメカニズムなどを議論しました。そして、社会課題の根拠が「不安」につながっているのではないかと考えに至りました。これを、これから社会に議論を促すためにもわかりやすくまとめて伝える必要があると考え、『Crisis 5.0』というレポートにまとめて発信することにしました。

現代社会は、気候の変動であるとか人口の都市への集中だとか、さまざまな社会課題に直面しているわけですが、ここでは、それらを「現象」と捉えています。私たちは、この「現象」によって、人間にとって大切な生命や財産、人権やアイデンティティが脅かされることで、社会課題の本質だと考えました。これを3つの喪失としてまとめたのが、『Crisis 5.0』です。

3つの喪失とは、まず「信じるものがなくなる」。人類は古来より、未来は今より良い社会であるというのを信じてきましたが、この永らく信じてきたモデルが揺らいでいるということです。2つめは「頼るものがなくなる」。日本においては、これまで国という大きな頼ることのできる存在があったわけですが、これも、人口構造の変化やグローバル化などの影響で、必ずしも私たちの生活の広い範囲を将来にわたって守ってくれるかという点、それも揺らいでいる。そして最後は、AIやロボットなどによる自動化・効率化が進むことで「やる事がなくなる」。

もちろん、将来を悲観するためにこれをまとめたわけではありません。答えがひとつではない複雑な社会課題に取り組むときに、私たちに脅かす不安、危機というものを明確化し、克服すべきポイントを整理する。まずは、社会課題に対する自分たちなりの考え方を持つということが、スタート地点になると思って作ったのが『Crisis 5.0』です。Society 5.0の社会システムは、これらの課題解決を対象にしていこうかと思っています。

(\*) PESTの視点(P 政治、E 経済、S 社会、T 技術)で将来の動向を文献やニュースなどからリサーチし、それらを掛け合わせる考察によって、人々の考え方や行動の変化の方向性について25個にまとめたもの。

『FUTURE TRUST』

——いま取り組まれているテーマはありますか。

柴田 Sは、『Crisis 5.0』を踏まえ『FUTURE TRUST』というテーマに取り組んでいます。いろいろなデジタルの技術が生活の至る所まで浸透してきたときに、人と人のつながり方であるとか、人と物、人と組織のつながり方が大きく変わっていきます。そうすると信頼の築かれ方が変わるのでないかと考えました。このテーマを追求することは、利便性の追求とは異なる社会の軸になりますし、さまざまな社会的コストを下げることもつながります。これから社会システムを考える上ですごくプラスにな

ていくことを試みました。

### 実践でビジョンを探索するフューチャリビングラボ

——「ビジョンデザイン」を、研究だけではなく実践している試みはありますか。

**柴田** ビジョンを発信していくことに関して、これまでもいろんな企業の方に興味を持っていただき、ディスカッションをさせていただけました。その上で、やっぱり議論だけでなく、実践も行いながら探索しようということで、地域の方と一緒に、新しい社会で大切にされるべき価値を考え、作り出すフューチャリビングラボという活動を始めています。

ビジョンの議論にはたくさん発見があるのですが、やっぱり実際の場では全然意味が違ってきます。本当にそれが理解されるのかという面もそうですし、どういう方と協働するとそれができるのかということもそうです。市民が技術を使いこなそうというときに、技術がリードし過ぎると生活の中に入っていくのに時間がかかってしまうことも多い。リアルなフィールドでやらせてもらうことで、考えなくてはいけないことがたくさんあるということを、すごく実感しています。

国分寺で採れた農畜産物を、国分寺の飲食店がそれぞれオリジナル料理にして提供するという地産地消の「こくべじ」という国分寺市の活動があります。私たちは、市民の皆さんをこの地産地消のサイクルの中心に持ってくることをねらった「つれてって、たべる。わたしの野菜」

という企画を「こくべじ」メンバーと考え、スマホ用ウェブアプリケーションやポスター等を作り、イベントを開催しました。やっぱり今まで日立がやってきた大きな仕組みを作っていくという事業とは全然違うなと感じています。地域の方と小さな仕組みを作って、顔が見える形でその反応が見られるというのは、活動を通じて学べるものが違います。

### 『協創の森』という新しい場

——そういうさまざまな人や企業との協創の場として今年4月にオープンしたのが、ここ国



撮影:吉村昌也(『協創の森』)

分寺の『協創の森』だと伺っています。柴田さんはここを、どんな場にしていきたいとお考えですか。

**柴田** 『協創の森』というこの施設ができるまで、ここは日立中央研究所という閉じた世界で、最先端の技術を研究・開発する場所でした。そこをオープンにしていこう、協創の場にしていこうというのは、これからは日立だけではできないことに挑むという意思表示でもあります。ここにあるフロアは私たちとコラボレーションをしてくれる人たちがオープンに入れる場所になっていて、ランドチャレンジと呼ぶいくつかの協創プロジェクトがすでに動いていま



す。フューチャリビングラボもそのうちのひとつで、先日もコラボレーションパートナーである国分寺市役所の方と「Society 5.0」の勉強会をしました。そのあと、市の若い職員の人たちもこの部屋にお招きして、雑談を交えながら国分寺市のいろんな課題であるとか、新しい取り組みの話を見せていただきました。

繰り返しになりますが、「Society 5.0」の社会課題は、日立だけで解決できる問題ではなくなっているし、研究としてもそういう問題設定ではなくなっていることは確かです。外の方にはどんどん入ってきていただいて、話し合いながら実際にフィールドで試していくことをやらなければいけないと思います。そういう意味ではすごくいいオフィスができたので、オープンな協創の日立のスタイルというものを作って、それを日立グループの中に広めていきたいと思っています。

■本誌ではダイジェスト版を掲載しました。完全版を「Executive Foresight Online」に掲載しています。  
[https://www.foresight.ext.hitachi.co.jp/\\_ct/17285961](https://www.foresight.ext.hitachi.co.jp/_ct/17285961)

